

地塩

No.427

2022. 10. 9

目次

発行日 2022. 10. 9
 創刊 1926. 9. 10
 編集 蕃山町教会執事会
 発行人
 印刷人 山陽印刷(株)
 発行所
 岡山市北区蕃山町2-15
 日本基督教団蕃山町教会
 TEL = (086)224-1322
 FAX = (086)224-1329
 三井住友銀行岡山支店
 口座 普通 0962358

礼拝説教 2022. 7. 17

「自滅の道を歩む者」

ローマの信徒への手紙 二章一〜五節
 牧師 服部 修

ピタゴラスといえはピタゴラスの定理が有名ですが、この定理に基づく $\sqrt{}$ (ルート)で表記されるいわゆる「無理数」と呼ばれる「数」が登場します。

ところが当のピタゴラスは「無理数は数ではない」として弟子たちに対してルートを使った数字を禁じたという逸話が残っています。ピタゴラスは無理数を「数」としては認めたくなかったわけです。この事例は、私たち人間は自分が想定している規則とか、基準とか、方法論、考え方にこだわってしまつて、それ以外のものは認めることができず、排除する心理が働く、ということを示しています。私たちは自分が受け入れられないものを受け入れることができません。そういう存在なのです。

「だから、すべて人を裁く者よ」とパウロは描写しましたが、この「裁く」という言葉は断罪するというよりは「分けておく」といった意味の言葉です。そうしますと「人を裁く」というのは誰かの罪に対して異議を申し立てることはもちろんですが、「あの人は私とは別」と切り分ける行為も含まれています。誰かの何かを認めることができない、という感覚も、ここに言

われている「裁く」と同じことを意味していますし、受け入れられない、ということも「裁く」と同じ行為です。そのように言いかえると、「裁く者」とは「受け入れない者」「認めない者」「愛さない者」「ゆるさない者」のように言いかえることができます。そうしますと、「裁く者」は、どこかの誰かのことではなく、私のことだ、と気づかされるのです。そう、私たちには排除する心理が常に働いているのであつて、それは私が誰かを切り離すことだけではなく、私が誰かを受け入れないこと、拒絶することも裁くことになつている、ということなのです。そのようにして私たちは様々な立場において裁き合っている存在だと言えます。あ

えて言えば、裁き合いながら生きていくのが人間であり、裁き合いが支配しているのが、私たちが生きている世の法則であるし、裁き合うことによつてしか生きられないのが私たちの本質なのです。

しかし、この裁き合う関係性の中に生きていく限り私たちに平安が無いことは明らかです。私が誰かを裁いているように私も誰かから裁かれている、

というまぎれもない事実がそこに存在しているのです。例えば「倍返しにする」だとか、良く言われる「マウントをとる」という行為も、この裁き合いの一形態です。こうして果てしない裁き合いに発展し、私たちは疲れ果てるのです。それなのにその裁き合う関係を止めることができないでいる。だからこそ神さまはイエスさまの十字架を通して、裁き合いの世に「ゆるし」をもたらしてくださつた。果てしないマウントの取り合いで疲れ果てて倒れるのではなく、ゆるしに生きよ、とイエスさまは罪のないお方でありながら罪人として裁かれ、ゆるしの希望をもたらしてくださつた。「ゆるしのないところに喜びはない。」イエスさまの十字架の悲惨なお姿はそのことを示したし、私たちはこのお方を信じて救われ、赦され、喜びの中で生きることができるようになつた。それなのに、あなたたちが今も裁き合う関係に生きようとしていられるなら、神さまに対して弁解の余地はない、と告げられたのです。

パウロは、他人を裁くことはあなた自身を裁いていることになる、と言います。それは、あなたはゆるされた者であるはずなのに、なぜ他人を裁くことでゆるされた自分を裁いているのか。そしてあなたが他人を裁くことで自分を裁いているとするなら、神さまがあなたをゆるした、という恵みをあなた自身が無駄にしてしまつていることに気づいているのか、と伝えたいからです。

だから厳しくも、そういうあなたは「神の裁きを逃れられると思うのですか」とも問うたのです。神さまの赦しを自ら無効にしようような生き方、イエスさまの十字架の死を無駄にしてしまふような生き方に対して、それは結局あなた自身を滅ぼす道であり、あなたにとって自滅の道にしかならないのだ、と伝えるのです。ゆるされた者として、どこまでもゆるされた喜びを体現し、ゆるしの喜びをもたらすために生きるのが救われた私たちの生き方です。神さまは、毎日毎日私たちのことをゆるしてくださりながら「今日もお前をゆるさなければならぬのか」と不平をつぶやかれることは決してないし、「昨日もゆるしてやったのと同じ過ちを繰り返すなんて、昨日ゆるしてやった意味が無いではないか」と不満を言われることもない。どのような時にも「赦す」と告げてくださっている。その「赦し続ける」という神さまの恵みの中にありながら、どうしても裁き合うことをするのか。排除し、愛さず、ゆるさず、受け入れない生き方をしようとするのか。「ゆるされた」ということがどれほど大きく、測り知ることのできない恵みであるのかを、私たちはいつも思い起こす必要があるのです。まさにゆるしを忘れるところに自滅の道、裁き合う疲弊の關係が生じてしまうからです。だからこそ「あなたを赦された者」との神さまの約束の言葉を聞き続けることが、私たち、

本質的に裁き合うことしかできない私たちにあって希望となり、慰めとなるのです。そして「あなたは赦された者」との約束の言葉を、一度でも聞きそびれることは、あなたの人生にとってダメージを与える損失だし、そのことに気づかないのが私たち。そして神さまはそれが命を失うほどの損失であることをイエスさまの十字架の死によって示し、救いに、またゆるしに生きよと告げてくださったのです。

そしてパウロは四節にこのように述べます。「あるいは、神の憐れみがあなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と寛容と忍耐とを軽んじるのですか」と。

この「神の憐れみ」は「怒りを遠くに置くこと」です。ですから、怒りは悔い改めをもたらさない、と言っています。事実、悔い改めは怒りではなく赦しによってしかもたらされないことを、私たちはイエスさまの十字架のお姿において示されています。「悔い改めよ」と怒鳴りまわっても悔い改めは生まれません。ゆるす、徹底してゆるす、どこまでもゆるす、ということによってしか悔い改めは生まれません、事実私たちは悔い改めたのではなく、「あなたの罪を赦すから」との約束に基づいて悔い改め、洗礼を受けたのです。

そうであるなら、もしあなたが神さまの豊かな慈愛と寛容と忍耐を軽んじるなら、それは神さまがあなたから遠

ざけている神さまの怒りを、あなた自身で引き寄せることになる。だからゆるしに生きないことは自滅の道なのです。拒絶の道は神さまの怒りを引き寄せる自滅の道、なのです。そして、そういう私だからこそ、神さまはなおのこと今、この時にも怒りを遠ざけ、「ゆるしたから、ゆるされた喜びをもつて生きるように」と告げてくださっているのです。自滅の道をしか歩くことのできない私たちに対して、ゆるしをもってその道から立ち帰るように呼び掛けてくださっているのです。

これが裁き合いに生きる関係、裁き合いに生きる者であったなら「どうせ今ゆるしたところで、明日にはまた同じ過ちを繰り返すだろうからゆるさない」となります。「ゆるしたって無駄」、裁き合う者、ゆるされた感謝に生きない者はそのように考え、言葉にする。「ゆるしても無駄」。この言葉は、そもそも神さまが私たちに向かって語るべき言葉です。そして私たちは神さまの「ゆるしても無駄」という言葉に反論できません。事実何度同じ過ちを繰り返しているのです。でも神さまは「お前をゆるしたって無駄なのに」とは言われず、「ゆるすから」「ゆるしたから」と告げ続けてくださるから、私たちは生き続けることができるし、感謝して歩み続けることができます。

「だから、すべて人を裁く者よ、弁解の余地はない」。弁解の余地はないはずなのにゆるされます。「ゆるされ

ても良いのですか？」とかえって問いたい時もあります。でも、神さまの約束はゆるしなのです。裁き合うことによる疲労、受け入れず、拒絶することによる疲労を、ゆるしこそがいやします。自滅の道を歩む私が今ゆるされました。怒りを遠ざけ、ゆるされた感謝をもって生き始めたいと思います。神さまが私のことを「ゆるしても無駄」と言って排除されなかつた恵みを心から喜びつつ、排除の論理に生きる私たちの歩みが新しくされ、「ゆるし」という恵みの論理に生きる群でありたいと願うものです。